

袂割の雲、雲の妻は、忍痛の如くに私共
の上に投げられしを、

まゝも攻ちりし、運のねの、

浮へる木ぞ、木の芽なる、

仕積る海軍マリーチにあふれし月位三十七年

二月より、我隊左艦隊は堂々征露

の途につかんとし、今し佐世保の港とあ

たのむ。

陸地は水中を々に水軍線の彼方

傳水を行きませり。其は殿々西に傾て

何處かともなく、船な夕潮は西に静

に削ひ居るを、真黒い玄海の波

のみは徒に音高く、舷側を打つむし。

甲板にまゝ人の顔は、何れも沈

痛に緊張し、其中ら感慨を籠め

右最後の強禮を厚く行く、故国
の山河に對して、捧げやせぬ。

一月の夜、星一つもない黒闇の
る云海難の荒れ狂々、高波の中に漂
ひたひた、轉々として長い冬の夜の如く
るのを待ちあせす。即ち岸辺
は我が勇敵なる水雷隊隊は乾坤
一擲身命を賭して旋風の怒を
奮撃す。とぬるる。

「帝國の興亡、汝等ノ帯はかが臨
と女所司命長官の激勸を浴びた
が、世にとも遠く水戸線のはやみ
直えし行尼、可憐な次めは、まに新
と目にはおまます、其極よ隊
二